

いのちの現場・高次救急センターから

福島県立医科大学医学部附属病院
高次救急センター医師 池上之浩

【救急センターってどんなところ？】

福島県立医科大学附属病院高次救急センターは、主に県北地方で発生する救急患者の受け入れ窓口であるとともに、県内の救急医療の指導的役割を担っています。傷病者の症状や重症度は多岐にわたり、救命には、迅速な病状評価や専門的な治療を要します。センターには常に専属の医療スタッフが待機し、急患収容依頼の連絡が入ると事前情報をもとに万全の準備で到着を待ちます。収容後はセンター内で種々の画像検査や血液検査を速やかに行うことができ、高い専門性を要する疾患については、即座に専門医の診療につながります。

【救急センターの実態は？】

現在、センターには年間約 15000 人が受診のために来院します。救急疾患の重症度は、三段階に分類され、一次救急：感冒などの軽症、二次救急：骨折などの中等症、三次救急：生命に危険が及ぶ重症となっています。総受診者のうち、救急車で搬送される傷病者は年間 1500～2000 人で、その重症度の比率は、一次 35%、二次 45%、三次 20%（2005.6～救急車受入統計）となっています。重症度の高い救急患者は、選択的に医大に搬送されるために他の医療機関と比べて三次救急の割合が高いのが特徴です。特に交通事故による多発性外傷、心肺機能停止、急性中毒や全身熱傷などは特殊な治療を要し、その多くが当センターに搬送されてきます。

【いのちにかかわる心肺停止】

一年間に県北地区で発生する突然の心肺機能停止は約 300 例です。原因として、心筋梗塞や狭心症発作などの心原性のものが多いですが、脳卒中や外傷などが原因の場合もあります。年齢や性別も様々で、いつ遭遇しても不思議ではないのです。心肺停止のような危機的状況に陥ってしまった傷病者の救命は、時間との闘いであり、その時その場にいる人々による蘇生術への参加が不可欠です。もし、自宅や職場で、突然そのような場面に遭遇したら何ができますか？

【どうする心肺停止…】

119 通報⇒CPR の実施⇒AED 使用⇒二次救急処置を救命の連鎖といい、最初の 3 つは、居合わせた人が行動しなければなりません。より早く正しく実行することで助かる可能性が高まります。倒れている傷病者に声を掛けても反応がない。呼吸もしていない時には、すぐに 119 番に通報するとともに近くに AED(自動体外式除細動器)があれば取寄せます。その間 CPR*1 (心肺蘇生法) を実施します。CPR の開始が遅れば、社会復帰率は著しく低下し、何もしなかった場合、心臓停止後約 3 分、呼吸停止後約 10 分で 50%が死亡してしまうといわれています(カーラーの曲線による)。特に不整脈が原因の心停止では、1 秒でも早い AED の使用により救命率が上がり、予後も良好です。現在では、一般市民にも AED を使用した電気ショックの実施が認められ、講習を受ければ容易に扱うことができます。ぜひ、AED 講習会や心肺蘇生法講習会に参加して一連の手技を身につけてください。それにより、危機に陥っている傷病者に対して、途方にくれることなく、勇敢に対処できることでしょう。

*1 CPR 基礎救命の A B C

A 気道(Airway)の確保：

頭を後屈させ、あご先挙上、(ただし頭や首に損傷がある場合は下あご挙上にとどめる)によって気道を確保する。

B 呼吸(Breathing)の回復：

自発的な胸の動きがない時には、人工呼吸法を開始。

C 循環(Circulation)の回復：

脈の確認をし、脈が触れない時にはすばやく心臓マッサージを開始。

【救えたいのちをまもるため】

救命された命は、治療や看護、傷病者本人の努力だけで、快復できるものではありません。看病す

る人による精神的な支えも重要になります。しかしながら、看病する人が疲労や不安などを抱えることも多いのです。医者や看護師だけでなく、身近な友人や地域の人々など社会全体で温かい支援や応援をして欲しいものです。看病者が元気になり、それがまた、傷病者の回復力を高めます。

【救急センターからみえる自殺予防の課題】

センターに来院する自殺企図者は年間 100 名前後と割合としてはさほど多くはありません。しかしながら、見過ごせない大きな問題です。特に自殺を図り助かった場合でも、再度自殺を図ってしまうケースもあり、以前当センターで統計をとったところ、再自殺企図者の半数以上が 6 ヶ月以内に次の自殺企図を実行していました。繰り返される自殺未遂を食い止める対策や、未遂者のケアも重要な課題となっています。退院後、確実に福祉や地域医療につなげるためのシステムの整備や、相談機関の充実など心身両面で支えになるようなネットワークができれば乗り越えられる人も少なくないはずです。社会資源を充実させ、自殺予防の必要性とその理解を促すことで、未遂者本人やその家族に対する支援も定着していくと考えられます。

【最後に…】

福島県立医科大学附属病院高次救急センターは、来年夏には救命救急センターとしてより高度な救急医療を提供できる施設となります。救急センターは、すべての患者さんが、与えられた命をまっとうできるよう、尽力する使命を持っています。ひとりでも多くの命を救い、そして、少しでも良好な状況で社会復帰ができるように努めます。退院していく方々が「いのちの存在」を喜びと受け止められる社会であって欲しいと願うばかりです。